

海の暮らし・陸の暮らし

品川用水

品川地域の村々は水不足に悩んでいましたが、これを解消したのが品川用水の開発でした。多摩郡の^{さかいむら}境村（現在の東京都武蔵野市）で玉川用水から分水した品川用水は寛文9年（1669）に完成し、全長約27.5kmにおよびました。これにより、農作物の生産高は大きく向上しました。

品川の農業

品川用水の完成により、農村が大半であった品川にも特産物が生まれました。その代表的なものが、品川のネギ、大井のニンジン、戸越のタケノコです。タケノコは、戸越村に別邸を持つ海運業者の^{やまじじろべえ}山路治郎兵衛が、寛政元年（1789）ごろ、薩摩藩（主に現在の鹿児島県）より^{もうそうちく}孟宗竹を取り寄せて栽培したのがはじまりです。周辺地域にも広がりを見せ、一大特産品となりました。

品川海苔

海苔は品川浦から羽田浦一帯の特産物でした。海苔養殖は1670年代ごろ、品川浦で養殖方法が工夫されて始まったといわれています。その後、次第に周辺へ広がり生産量も増え、将軍家に献上されるようになりました。品川海苔は浅草に運ばれ、江戸名産浅草海苔の名で販売され、その名が全国で知られるようになりました。

けたぶね 桁船

1/6 スケール 模型制作：^{こじまのぶき}小島延喜

品川の漁業は、南品川^{りょうしまち}獵師町（現在の東京都品川区東品川・東大井）を中心に行われました。そこで使用された船は、帆の力で船を横向きに走らせ、底引き網（桁網）を5～9つ引いて漁をしました。桁網を使用したことから、この船を桁船といい、その漁法を桁船漁といいます。品川浦の桁網漁は他の浦より盛んでしたが、19世紀半ば、台場築造の影響で漁獲高が減少しました。かわりに芝エビなどをとるエビ桁網が考案されましたが、漁具をめぐる他の浦と紛争となりました。



1_04_01



しっくいこてえ あめのうずめのみこと
漆喰鏝絵「天鈿女命功績図」(複製)

原資料：よりき寄木神社所蔵

品川区指定文化財

旧品川浦（南品川獵師町）の鎮守寄木神社の本殿扉の内側にあるもので、左官の名工伊豆長八いずのちようはち（1815～1889）の作。左の扉には、上部にアマテラスオオミカミ※、下部にアメノウズメノミコト※を、右の扉にはサルタヒコノミコト※を、形を盛り上げるように作っています。

※天照大神（太陽を支配する神であり、最高神の女神）は、スサノオノミコトの乱暴が原因で洞窟（アマノイワヤ）の中に隠れました。それにより世界は光を失い、闇に包まれました。神々はアマテラスオオミカミを再び外に出そうと洞窟の前で宴会を開き、アメノウズメノミコトが滑稽な踊りを披露しました。踊りを見た神々の笑い声に誘われたアマテラスオオミカミは、岩の戸を少し開けたすきに外に引きずり出され、再び世界に光が戻りました。また、アメノウズメノミコトは、アマテラスオオミカミの孫であるニギノミコトが天上界（タカマノハラ）から地上界に降り立った際、サルタヒコノミコトに道案内をさせました。この作品は、こうしたアメノウズメノミコトの功績をあらわしたものです。

1_04_02



そえうらこうきつ
添浦高札

正徳 4 年 (1714)

品川区指定文化財

海上航路の発達とともに海難事故が多発したため、正徳元年、幕府は全国の浦々に高札^{*}を建てて対策を通達しました。品川浦 (南品川獵師町) の浦高札^{うらこうきつ}は 2 枚が寄木神社^{よりき}に伝来しました。1 枚は正徳 2 年のもので、江戸城に納める米を輸送する船が難破した時の処置方法などを定めています。もう 1 枚は正徳 4 年のもので、密貿易を禁じたものです。獵師町の高札場に掲げられていたものです。

※高札：法令や禁制を書いた板。高札を立てた場所を高札場といい、人通りが多く目立つ場所に設けられました。

1_04_03



品川用水 地蔵の辻模型

品川用水が目黒川方向と立会川^{たちあいがわ}方向に分かれた地蔵の辻 (現在の東京都品川区小山 2 丁目の後地^{うしろじ}交差点) の想像模型です。辻の名前は、現在も残る朝日地蔵尊の名から付けられています。

1_04_04



ごぜん
御膳海苔献上箱

明治時代か

品川区指定文化財

徳川将軍家や将軍家の菩提寺である寛永寺（東京都台東区）に乾海苔（ほしのり）を献上した際に使用したものです。

1_04_05



ノリゲタ（海苔下駄）

江戸時代から昭和 37 年（1962）

品川区指定文化財

海苔を育てるために海中にヒビ（そだ 籠朶）を立てる時や、海苔を採る時に履いた下駄です。これは、やや深い海域で作業をする際に履きました。

1_04_06



スダレ

江戸時代から昭和 37 年（1962）

品川区指定文化財

薄く四角形に漉いた生海苔^{なまのり}をはりつけ、天日や火力で乾燥させました。スダレは、格子状の木枠であるワクボシに掛けて使用しました。